

87次で検出した壙の延長位置にも調査区を設定した。地表下約30cmで地山となる。耕作に伴う小溝を多数検出したが古代に遡る遺構は検出できなかった。しかし少量ではあるが、工房時期の土器が出土した。また、東の谷から続く壙の想定位置の調査区は表土下すぐに地山となり、極めて大きな削平を受けたようであり、壙の続きは検出できなかった。

出土遺物

工房生産関連遺物・瓦・土器・石製品などがある。工房生産関連遺物はⅡ区・Ⅲ区を中心として出土しており、鉄・銅製品、坩堝、鋳型、輪羽口、砥石、鉱滓、漆付着土器、ガラス片、ガラス坩堝などがある。

まとめ

今回の調査によって明らかとなった点をまとめると、①各調査区に工房関連の遺構・遺物が存在し、工房は西の谷の西斜面から南斜面にかけてさらに展開していることを確認できた。②西斜面は工房構築時に、大規模な造成工事がおこなわれており、里道から西の現地形は、この古代の造成に起因することが判明した。③西の谷の最奥部で、第87次調査で検出した金・銀工房の南端を検出し、焼土面の広がりと炉の密集状況を確認できた。また、この工房の南上方に別の工房が存在する可能性が高いことがわかった。④Ⅰ区で検出した掘立柱壙は、工房の西を区画する施設であった可能性が高い。

(安田龍太郎)

コラム：あすかふじわら

◆飛鳥池に蓮華咲く

—飛鳥池遺跡出土の

超小型軒丸瓦と蓮華紋鬼板—

飛鳥池遺跡からは、飛鳥寺で使用されたとみられる特殊な軒丸瓦と鬼板が、それぞれ1点づつ出土している。その2例を以下に紹介する。

まず1は、面径約8cm、厚さ約1.5cmの超小型軒丸瓦である。瓦当紋様は「船橋廃寺式」と呼ばれる均整のとれた素弁8弁蓮華紋で、肉薄の蓮弁端は明瞭に反転している。半球状に盛り上がる中房には蓮子が表現されていたであろうが、灰白色のきわめて軟質の焼き

であるため摩滅し、その有無は不明。厚さ約1cmの丸瓦が高い位置に取り付く。接合方法は不明。瓦当裏面には丁寧なナデ調整が施される。長石等を含む、やや砂質の胎土である。このようなきわめて小型の軒丸瓦は、菅原寺(奈良市菅原町；奈良前葉～平安初頭)や南春日町遺跡(京都市西京区大原野南春日町；奈良後半～平安前期)など他の遺跡でも出土しており、甍瓦や築地使用、小塔・小仏堂使用などの用途が考えられている。飛鳥池遺跡出土例は、その瓦当紋様から7世紀第2四半期に位置づけられ、小型瓦としては非常に古い時期のものと言える。

次に2は、素弁蓮華紋の鬼板で、残存するのは右下端部である。外区は素紋。内区紋様は素弁が1弁残るのみで、その構成は不明。間弁はない。外区とその立ち上がり、および側面は丁寧になでて仕上げ、裏面全体には繩叩きで平坦にした調整痕が残っている。焼成は堅緻で灰色を呈し、胎土は大きめの長石粒を含むやや砂質のもの。焼成・胎土が飛鳥寺禪院の瓦に共通することから、製作時期は7世紀後半に求められるか。なお素弁蓮華紋の鬼板は各地に類例があるが、同范品は確認されていない。お仲間は登場するや否や。

(播磨尚子)

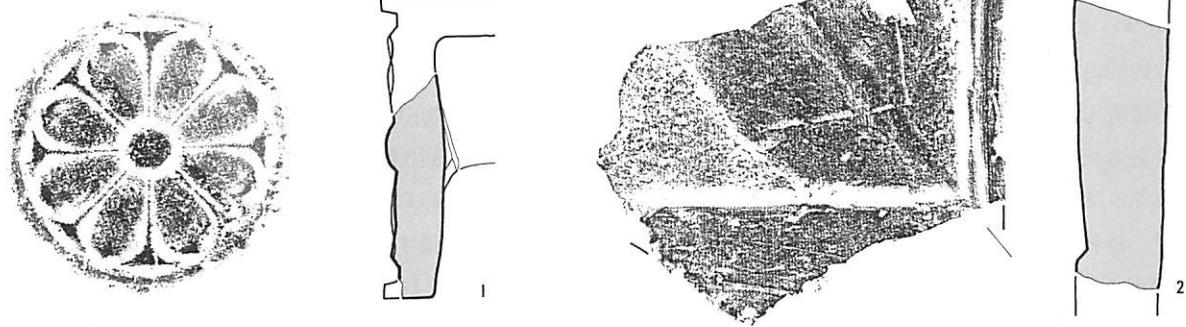


図42 飛鳥池遺跡出土瓦 1:2